

ましたが、ようやく上陸が許可となり、頭からDDTを散布され、一人三百五十円をもらって故郷へ帰ることになりました。

我々の部隊の十七年〜十九年ごろまでの兵隊は福島県が多く（それ以外は群馬県）、いわゆる郷土部隊でしたから、郡山、会津若松、福島と仲間は一緒になって乗車して復員しました。

私の家は、両親も健在、二人の兄も復員していました。農家ですから都会と違って食料は何とかありました。一年後に郡山へ出て来て、前職の洋服縫いをはじめ、それから四十年間続け現在に至っています。マリアの後遺症もありましたが、四十三歳の時に三年間も腎臓を患い、糖がでて、食事療法によって肥らぬよう（七五キロを六二キロ）にし、現在は体調がいい。戦友会は三方面に分かれており、私たちは毎年のように戦友会を開いて交遊を続けています。

## 常德作戦の苦しみと

### 玉砕した戦友を想う

静岡県 鈴 木 惣太郎

私が静岡県賀茂郡の稲取町で、沿岸漁業を業とする家の長男として生まれたのは、大正十年三月五日でありました。学校を卒業し軍隊に行くまでは父を助け漁業に従事していましたが、昭和十六年兵としての兵隊検査は四月に行われ甲種合格であり、昭和十七年四月十日、中部第三部隊（静岡の歩兵第三十四連隊の留守隊）に入営しました。

内地で一期の検閲を受けるまでの三カ月間は地獄のような教育でした。その後、大部分の戦友は十二月に、第三十八師団（沼兵団）でガダルカナル島へ行き、ほとんど戦死しました。そのうち一人だけが、十八年三月、ガ島生き残りとして生きて帰り、今でも時々会っています。

内地に残った私は、七月八日の大詔奉戴日二日間の外泊で家に帰って親たちを安心させたのですが、その後外地へ出発することになったのですが、家の者に知らせようと、静岡駅出発のとき、知っている者がいたら手紙を渡そうと持っていたのですが、憲兵が見張っていてできませんでした。

宇品港で乗船し夕方出航したのですが、音がしないのでどこへ着いたかと思ったら門司でした。その日は七月二十三日でした。甲板へ上がったら同級生の見習士官がいて「鈴木来たか」と声をかけられ安心しました。静岡を出る七月二十日ころは、まだ「勝ってこいよ」と歓呼の声で送られたし、行く先は中支と分かっていたので、勇んで出発することができました。

船には糧秣・弾薬を積んで午後四時ころに門司港を出航して一時間くらい走ったときでした。「全員甲板へ上がれ」という命令が出て、船上に整列したら部隊長が「日本を見るのもこれが最後だ」と言われたとき、玄界灘から見る日本は、ちょうど伊豆の稲取から大島を見るように、日本の山々が夕日に照らされて美しく

見えました。私も、ああこれが日本との最後の見納めかと思いました。

乗船者は第三師団要員で、現役兵と召集兵は三十歳から三十五歳くらいで、妻もあれば子供もある人たちで、夕日に涙が光る兵隊もいました。そのときはだれもが再び日本に帰れるとは思っていなかったでしょう。揚子江の入口の呉淞に着いたのですが、船酔いがあったり、日射病などで三分の一が倒れていました。回復するまで一カ月は上海に駐留、軍歌演習をしたり、上海警備などをしながら英気を養っていました。

わが部隊は中支派遣幸第三七〇三部隊（静岡歩兵第三四連隊）で、連隊本部は、湖北省漢口から北方の信陽の前線にありました。その時は、残暑が厳しい年でした。

大別山作戦は十月の末から始まり、十一月からは寒い寒い冬でした。新兵の私たちは顔や手に霜焼けやひび切れができ、深い雪の中の山また山の作戦は、温暖な気候の伊豆の海岸で漁業をしていた私にとっては厳しい作戦でした。我々初年兵にとっては初陣であり、

三、四回の戦闘があり、わが第一中隊でも四十名の兵が敵弾に斃れ、無念の戦死をとげた状況は忘れることができません。

昭和十八年十月ごろから常德作戦に入り、漢口に集結して、湖南省常德へ常德へと行軍が始まったのは、十一月初旬でした。敵は重慶から援軍が動員されて大軍となり、迫撃砲とチェッコ式機関銃で我が部隊目掛けて一斉射撃です。そのとき、小隊長が右前方の小高い山へ登れという命令を受け、登っているとき、三、四名が敵弾に斃れましたが、山に登って敵に対し重機関銃を発射しようとした寸前、敵チェッコ機関銃の一斉射撃を受けました。頭上から松葉がバラバラと落ちてきて生きた心持ちはしませんでした。

二、三分くらい経ったら、銃の音が遠くなったので重機関銃と後方から連隊砲が発射され、十分ぐらいの射撃で敵は後退したので、突撃すると敵陣には四十人ほどの死骸が残されていました。ここでも幾人かの戦友を失いました。その夜は、戦いの思い出話をしながら露営をして夜を明かしました。さらに常德へ常德

へと行軍が始まりました。その戦闘で友人の戦友は交戦中、二人は顎と手をやられ、今は傷痍軍人となっております。

常德を包囲したのは、昭和十九年の二月ごろでした。その間にも敵との交戦は四、五回はありました。包囲したのがなかなか陥落しません。三日間、銃声や砲声のない日はありませんでした。在支米軍の四発の飛行機（コンソリデーテッドB24）が包囲している日本軍を爆撃しましたが、朝から総攻撃を開始し、常德城を陥落させたのは十時ごろだったと思います。日本軍が入ったというので、敵は城内から撤退しました。

そのとき、私たちの部隊は、重慶から応援に来た敵兵を山の上から重機関銃と野砲で攻撃していました。十一時ごろに常德の方向を見ますと黒煙が上がっています。上空を見ると上空には四機の飛行機が飛んでいます。この戦闘で第六連隊長が戦死したらしいとの噂も聞きました。

師団本部から撤退の命令が出て、漢口に向かう行軍が始まりました。昼は敵戦闘機の機銃掃射があるので

夜行軍となる。食糧も少ししかなく、マラリア病も出て幾人かの者が高熱で歩くこともできなく倒れて行きました。落伍者は多かったです。

漢口に着いてからも、高射砲攻撃や機関砲があり、敵機との戦闘があるので昼間は山中に隠れ、夜行軍は地獄のようでした。漢口でも多くの戦友を亡くしていきます。常德作戦が終わり、信陽の歩兵第三十四連隊に帰ったのは昭和十九年二月末で、師団司令部は応山にありました。私は命令受領者として師団司令部と信陽の連隊司令との連絡に往復していました。私は第一選抜の上等兵でしたが、初年兵や補充兵は大変でした。また、師団司令部の勤務をしていましたので、多くの戦友が戦死・負傷したり、病死したのに、命を永らえることができず亡くなりました。亡き戦友を思うとき、今でも涙が込み上げてきます。

昭和十九年四月には湘桂作戦の準備に忙殺されましたが、急に内地の教育要員とし（第三十四連隊の同期の者がほとんどでしたが）、十五名選ばれ（第三師団で三十五名、曹長が長で）南京に下りました。し

かし、空襲のため上海へは行かず、大陸回り、津浦線北支、山海関、朝鮮經由で内地へ帰るのですが、状況が悪いため一週間くらいかかり、下関に着いたのは、昭和十九年五月十五日の夕方でした。

その後、我々の仲間は湘桂作戦に出まして、その人たちが帰って来たのは、昭和二十一年三月ごろでした。骨と皮とになっていて気の毒でした。同窓会名簿を作ったのですが沢山の友達が死んでいます。

それに対し、私は十五日の十一時の夜行で徳山へ行き、海上駆逐隊教育隊要員となりましたが、部隊は空っぽで、満州から来ていた兵隊もいたり、召集兵もいて、その人たちの教育をしました。そのとき、私は伍長に任官していました。この部隊は沖繩要員でした。

私の任務は補充兵の教育ではなく、濟州島、朝鮮釜山へ物資を運ぶ船（七〇馬力の計画造船）の徴発になりました。博多港の造船所で待っていて、入って来る船を船長、船員ぐるみ徴用するのです。その船で夕方出て明け方くらい、一四ノットで七、八時間かけ釜山へ着くのです。積み荷は糧秣や弾薬です。大きい

船は潜水艦とか空襲で狙われるから、小型の船で輸送しました。この勤務は十九年十月ころまでやりました。

この部隊は門司中学に部隊本部があり、山口県櫛ヶ浜へ小屋を建てていた海上駆逐隊と言われた部隊で、私は十月過ぎ、そこでも兵隊を教育しました。

私は重機銃隊出身なので、広島へ行き二連装の高射機関銃の教育を受けて、十一月末に隊に帰って来ましたら、中隊は空っぽで内務係准尉が留守をしていて、「大きな声では言えないが、外地への派遣で、部隊はほとんど出ていった」と言う。我々の仲間ほとんど水上特攻で死んでしまいました。「これに乗れば二階級特進だ」と言われてです。

残った私は、昭和二十年八月ごろまで入ってきた補充兵の歩兵教育をしましたが、その内容は敵が上陸して来たら夜襲をする突撃訓練です。アンパンと言われた地雷、円型の中心に信管があり、竹竿の先につけて、壕に入り戦車の来るのを待つ。これを戦車のキャタピラに突っ込み爆破させるのです。また、破甲爆雷の者は、戦車が来たら、磁石の付いたこの爆雷を車体に付

け爆破させるといふ、いずれも肉弾特攻教育でした。

初年兵の装備は、九九式歩兵銃が足りなく一人一銃は渡らない。帯剣の鞘は竹である。水筒はあったが、弁当箱は柳行李。初年兵は現役もいたが三十五〜四十歳くらいのも未教育補充兵でした。「気を付け」「休め」から教えなければならぬ。この人たちは本土防衛のための根こそぎ召集者で、対上陸作戦の要員です。

この部隊は解散となり、五月になったら、鉄道がやられて不通になるので桑名で海上輸送に当たれと命令され、一個中隊一六〇名で、船舶徴用にかかったのですが、六月七日ころ、桑名の街は空襲で八割ぐらい焼け野原となってしまい、私の中隊でも十五〜十六人くらいは戦死者をだし、兵舎を桑名の北の長島の小学校に移し、海上輸送のための段取りをしている時に終戦になりました。

八月十五日、十二時、天皇陛下下のラジオ放送があるというので聞いていましたが、雑音が多くて何だか分かりませんでした。私は隊の衛兵司令をやっていたら准尉が一時ごろ帰って来て、「終戦だ」と言われ

て初めて知ったのです。そのとき、後輩だった見習士官は泣いていました。

部隊の三個中隊くらいは蒲郡へ集結、九月二日天皇陛下の御真影の前で、部隊長が「終戦の詔書」を読んで、軍関係の書類全部を焼却しました（軍歴はその後に復元）。

部隊は解散しましたが、私は軍曹になっていたので、准尉は「残務整理に残れ」と言われましたが、三年以上も家に帰っていないからと断り、九月二日、蒲郡から稲取へ帰ったのですが、家に着いたのは陽のあるうちでした。「家の敷居をまたぐまでは階級章を付けて行け」と言われ、兵隊は全部兵長の階級章を付けて家に帰させました。私は家に帰って、初めて父の死を知りました。しかし、他の家族、祖父母や母や弟妹は元気でした。終戦後は私が家長として、九人の家族を養うことになりました。

私たちは幸いに生きて故郷に帰り、荒れ果てた祖国復興と、この美しい故郷のため「ガムシヤラ」に働き続けました。平和な社会、豊かな経済再建を成し遂げ

ながら老年の域に入ってまいりました。これからも生き続けて子孫のため、郷土発展に尽くして行く積りですが、何につけても大陸の野戦に散った亡き戦友のことを思うとき、万感胸に迫り、ただただ御冥福を祈るのみであります。

## 父母の祈りか、

### 兄弟六人全員生還

千葉県 本吉 進

私は大正十二年九月六日、千葉県長生郡長南町の農家の六男として生まれた。学校卒業後は農家の手伝いをしていたが、戦争も熾烈を極めつつあった昭和十八年徴集兵とし、千葉県茂原町で検査を受け、第一乙種合格となった。当時は第一乙種も現役兵で、昭和十八年十二月二十日、東部第六十四部隊の東葛飾郡布施村の隊に入営した。

その部隊の営庭には工兵の第十四部隊もあったが、